
転生王女～異端の王女

阿修羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生王女〜異端の王女

【Nコード】

N4722V

【作者名】

阿修羅

【あらすじ】

バイクにはねられ気がついたらなぜか赤ん坊、新しい両親は超絶美形の王族で自分はなんと王女？魔法やらなんやらファンタジー溢れる異世界に転生してしまった元女子高生の波乱に恋愛と平凡とかけ離れた人生を書いていきます。

多分シリアス：

できたら主人公は最強を目指させたいです

プロローグ

今私はもの凄く困惑している。

私はたしか暴走したバイクにはねられて…死んだはず。なのにこの状況はどういうことだろう。

まず今私の視界に入っているのは（なんかぼやけて見えにくい）優しそうな雰囲気を漂わせた絶世の美女と王冠を頭にのせている品性溢れる美青年。

共に嬉しそうな顔を私に向けて微笑みあっている。眼福眼福…じゃなかったなぜ私に向かって微笑んでいるんだろうと不思議に思っていると、信じがたい言葉を絶世の美女の口から飛び出した。

「やっと会えましたね…私の愛しい姫。」

…ちょっと待て。

混乱しだした私に構わず絶世の美女は美青年と会話を続けている。

「私よりも陛下にそっくりですからきっとかなりの美姫になるのでしょうね…そうは思いませんか、陛下？」

「私よりお前に似ている…将来が楽しみだ。」

といって尋常ではないイチャつきを開始する。

…この会話と視線の方向からして姫というのはなぜか私のことらしい。そしてこの超絶美形のお二人は夫婦。そして美青年は王様らしい。

……。

嫌な予感がする。

私は自分の頭を抱えようとした…がここで異常なことに気づく。手足が生前に比べて短く、まるで赤ちゃんのよう。嫌な予感を見無視して言葉を紡ぎだそうと試みてみる。とりあえず自分の名前を。

「…あうあうう。」

「なんてかわいらしい姫君なのでしょう…お姿ばかりでなくお声まで。」なぜか周りの女性達からほうと溜め息が漏れた。

…何か余計なことを聞いた気がするがとりあえず間違いない。

私は今赤ん坊…所轄転生をしてしまったらしい。そして両親は生まれたばかりの我が子（私）の目の前で異常にイチャついている超絶美形夫婦で…職業は王様と王妃。平凡には生きれそうにないな。

……。

呆然としている私を置いて私の新しい両親は相変わらずのイチャつきぶりを発揮している。どうやら愛を囁きあいながら私の名前を決めているらしい。…なんか疲れてきた。

「私達の姫…名前はユリアナにいたしませんか、陛下。私の名前と陛下の名前から。」

「ユーリアとユリウスの娘ユリアナ：そうしよう。私達の愛の結晶にはぴったりだ。」

そういつて私を抱き上げ再び言葉を紡ぐ。

「魔力も歴代をしのぐ強さだし：心配だよ。」

「大丈夫ですよ：私と陛下の子ですから。きっと乗り越えます。」
そういつて頬を寄せる。

魔力だと…！。

もうどうにでもなれ。私は考えることを放棄することにした。

神埼結羽 18歳。

私は異世界に王女として転生を果たしました：多分。どうやら魔法が使えるらしい。

大丈夫なのだろうか私の人生…。

プロローグ（後書き）

初投稿ですが頑張って更新します

4年後、4歳の私の日々 上 乳母と残念なイケメン騎士（前書き）

4年経ちました

4年後／4歳の私の日々 上 乳母と残念なイケメン騎士

日光が窓から射し込み、小鳥がまるで絵本の世界のようにチュンチュンとさえずっている気持ちいい朝。

「…どうしたものかなあ。」

ある国の城の自室の窓辺で少女は呟いた。
この世界に転生してから早4年の月日が経った。私は4歳になったが、なにせ前世の記憶があるおかげですっかり世間一般の4歳児とはかけ離れてしまっていると我ながら思う。前世での私はごく普通の女子高生だった。勉強して、友達と遊んで、家族と談笑…それがどうだ、今では大国のお姫様。

「我ながらすっ飛ばしたよね、いろいろと。」

つい一人ごちる。なんか最近の私は危ないな…そこらのおじいちゃんおばあちゃんみたいになってるよまだ4歳なのに。4歳児がこんなにペラペラ喋ることは…うん、努力の賜物ってことにしておこう。

私が転生した世界は魔法やらファンタジーの塊で、元の世界では考えられないものばかりで溢れかえっている。私はそんな世界のアウル大陸に位置するゼノフィアという国の第一王女として生まれた。

しかもゼノフィアの国王夫妻：つまり私の今の両親は超絶美形で、娘である私も母様にそっくりらしい。私は認めないが。母様に比べたら私なんか宝石とそこら辺に転がっているごみくずを比べるようなものだ：ダメだ、なんか我ながら悲しくなってきた。

とにかく、私は本当に焦って混乱しての状態でよちよち時代を過ごした。上手く話せないし下の世話やら食事やらを侍女や乳母にしてもらおうという屈辱の毎日を送っていたあの頃は私にとっては苦い思い出の一つだ。

一人ボケーと回想していると、何やら扉の外が騒がしいことに気がつく。

「…何事？」

めんどくさいなと思いつつも問いかけないわけにはいかず、部屋の隅に控えている侍女のアナベルに聞いてみた。

「……例のあれにございます、王女様。」

器用に片方の眉毛をあげながら意味ありげに答えるアナベル。どうやってやるんだろ、あの眉毛の動き：今度聞いてみようなどと関係ないことに思いを馳せつつ、扉の向こうの光景を想像しないように努める。アナベルはまるで騒ぎなどないかのように平然としている。慣れてしまったのだろう。慣れて怖い。

私の思考がまた別の方向に向かっていているうちに、騒ぎの音はどんどん近づいてきている。

バンッ

大きな音ともに扉が勢いよく開いた。

「いつまでお部屋におられるつもりですか！」

特攻という名の入室を果たした乳母のアリヤが部屋中に響くどら声で喋る。

「…今行こうと思「陛下方はもうとっくにお席にお着きになつていますよ！早くいらっしゃって下さい！！」

私の言葉を見事に遮り一方的に言うのと、アリヤは風の如く去って行った。

「恐ろしく腹が立つ乳母だわ。」

「いつものことではないですか、さあまたどやされないうちに行きましょう。」

「…そうね。」

ここは大人しく朝食をとりに行くほうが無難だな。まだ腹は立つが美味しい朝食で気分を紛らせよう…うん、ナイスアイデア。

そんなことを考えているうちに着いたらしい。危うくドアとキッスするところを騎士に助けられた。

「お怪我はございませんか、王女様。」

「…うわ たっつ」

我ながら女の子らしくない悲鳴をあげてしまった。あ、どうしようよりによって騎士がものすごいイケメン…もうお嫁に行けない、顔から火がでそうだ。…平常心平常心。

「ありがとうございます。…えっと？」

「マリクスにございます、王女様。」

「マリクスですか。…迷惑をかけました。」

どもりながらも感謝の意を伝えると、満面の笑みで私に笑いかけてくるマリクス。イケメンの微笑みは威力が半端ない。

「いえ、礼などいりません王女様。私達騎士はあなたをお守りするために存在しているのですから。いわば私達はあなたの盾。この命、存分にお使い下さいませ。」

うわぁ：イケメンなのにセリフが寒い。私がまだ4歳ということを考えて言っているのか怪しいものだ。鳥肌が止まらない：

「そ、そうですか「王女様、早くご入室を。」

アナベルが見かねたのか助け船を出してくれた。アナベルありがとう一生感謝するわ：

アナベルに感謝の思いを抱きつつ早く入室しようと歩を進める。いや、しようとした。

「王女様！」

…そうこの声さえなければ。

「…何ですか。」

きつとかなり嫌そうな声が出たが、気にしちゃいけない。

「この私めに貴女様の手の甲に口付けをする栄誉をお与えくださいませ。」

鳥肌がさらにたった自信がある。

「…申し訳ありませんが騎士様、王女様は今からご食事をなさいま

すし、陛下方がお待ちくださっておりますのでお辞めくださいませ。
王女様行きましょう。」
アナベルがキレたようだ。

「そうですね…ではまた。」
そそくさと扉の向こうに姿を消すことに成功した。背中に熱い視線
が突き刺さったのは…私は知らない、気付いてなんかない、うん。
これだけは言える。私の中でのイケメン騎士の株は大暴落した。

4年後ゝ4歳の私の日々 上 乳母と残念なイケメン騎士（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます

4歳の私の日々 中 父様と母様（前書き）

続きです

4歳の私の日々 中 父様と母様

「今日も綺麗だね：私の愛しの王妃は。」

「陛下こそ、相変わらざるのお美しさと凛々しさです：愛してます。」

「私も一生愛してるよ。」

そして手を絡め見つめ合う二人。あの寒い騎士から逃れて一番始めに飛び込んできた光景は、いつも：いや、私がこの世界に転生してから毎日繰り返し返されている光景でした。

――…。

「……おはようございます。父様、母様。」

このバカップルめ

いつまで待っても私に気づきそうにない両親に、しびれを切らして私から挨拶した。：何回も言ったけど私はまだ一応4歳児なんだが確かに小さいよ、4歳だからね。：でもこれだけ扉の外で騒いだら（キモイケメン事件とか）普通気づくよね？ どんだけ二人の世界作っちゃてんのさ：ぐれちゃうぞなどこの間に毎朝思っている事を飽きもせずに思っていた私。

「……―あっ、おはよう、ユリアナ。」

「おはよう、愛しの姫。 今日母様に似て美しいね。」

私が言った後にやっと二人の世界から帰還した父様と母様：母様の心はまだ若干帰ってきてないっぽいな。

「…私なんて母様に比べたらごみくずです。 とうかそれ毎日会

うたびに言ってますよね父様。」

「そうかな？だが事実だから仕方ないよ。流れるような黄金の髪に、髪と揃いの瞳：つり目がちの目と瞳の色以外は瓜二つだからね：本当に将来が楽しみだよ。」

そのセリフ、私が生まれたときから言っていましたね父様。

「：陛下、お食事が冷めてしまいます。新鮮なうちにお食べになってください。」

「：分かったよ、では食べようか。」

終わりそうにない父様の話に、父様お付きの騎士の一人であるゴラス（ゴリラ顔）が父様を食事につかせるために声をかけた。騎士Ⅱイケメンだと世間では思われがちだと思うけど（キモ騎士もイケメンだしね）、ゴラスは少ない例外だと思う。でも彼のおかげで父様の惚気を最後まで聞かずにすんでいるからゴリラ：じゃなかったゴラスにはいつも感謝している：父様の母様への愛は半端ないからね、見てたら分かると思うけど。

「「「いただきます。」」」

やっとな朝食にありつけた：道のりが長かったせいかな、とっても美味しく感じるのは気のせい：ではないねきっと。

朝っぱらからアリヤとキモ騎士の騒ぎもあってか私の目にうつすらと感涙の涙が浮かぶ：おっと危ない危ない、朝食食べながら感涙の涙を流す4歳児とかアホすぎる。

「：そういえばユリアナ、最近魔法の授業を始めたそうですね？」
母様が首を傾げながら問う。

「はい母様。とっても面白いです！師匠もとっても分かりやすく教えてくださりますし！」

事実、私が受けている授業の中でもトップ5に入ると思われるくらいに面白い。余談だが、一番好きなのは武術と乗馬の授業である：

はいそこ、4歳児の習うことじゃないとか言わない。

「そうですか：ユリアナならきっと優秀な魔法使いになるでしょうね。」

母様はふんわりと微笑んだ。我が母ながら同性で実の娘である私でさえついうっかり見惚れてしまう綺麗さだ。陰で母様のファンクラブがあるらしいという噂も頷ける。

「はい、父様や母様や師匠のような魔法使いになれるように頑張ります。」

「頑張りなさい、ユリアナ。父様も楽しみにしているよ。」

「はい、父様。」

私の両親や師匠はこの世界でも有数の魔法使いらしいから難しいと思うが、私なりに頑張ろうと心に誓う。というか私はまだまだこの世界について何もかも知らなさすぎる。王女という身分でまだまだ幼児の私（精神年齢は別で）には外に行くチャンスもあまりない。学問のほうも頑張らなければ。

「：では私は授業がありますので失礼します。」

家族の談笑をしているうちに食べ終わった私は朝一の学問の授業に行こうと席を立つ。クリス先生怖いし：美人なのにもったいない。

「頑張っておいで。：いつてらっしゃい。」

父様と母様の笑顔につられて私の顔にも笑みが浮かぶ。

「いってきます！」

元気よく返事をして私は退室した。

：父様も母様も大好きです！

機嫌良く授業へ向かう私は気づかなかった。退室する私の後ろ姿を父様と母様が心配そうに見つめていたことに：私が思っている以上の平凡からかけ離れた人生かこれから訪れようとしていることに。

4歳の私の日々 中 父様と母様（後書き）

つぎは両親視点です

4歳の私の日々 中 閑話 両親side (前書き)

主人公が退室した後の夫婦のはなしです

シリアス…だと思います

4歳の私の日々 中 閑話 両親side

（両親（主にユリウス） side）

ユリアナが退室した後、私達はお互いを見つめ合う。

「…大丈夫でしょうか、陛下。あの子は…ユリアナは…。」
声が震えているのが自分でも分かってしまう。それくらいに我が子の事が心配で心配で堪らない。

「また魔力が強くなっていたね…もう私達を凌駕するほどに。」

「はい。毎日会うたびに強くなっています。」

ユリアナはまだ小さいのに…

「私達ゼノフィアの王族は代々先祖からこの世界で一番強い魔力を受け継いできた。…その中でもユリアナは一番の魔力の持ち主。これからたくさんの敵にその身を狙われるだろう。ゼノフィアの王族というだけでその身を狙われるのだから。…あの子にはたくさんの事を学ばせ、身につけさせなければならぬ…私達の大切な姫を守るために。」

そういつてぐっと手を握りしめる。ユリアナがわずか4歳の年でたくさんの学問や武術などを学んでいるのは、一重に娘を守りたい父親としての愛情からだ。いくらゼノフィアの王族といっても普通は早くても6歳から7歳ほどから初歩的な授業（武術や乗馬などもそこに含まれる）を受け始める。魔法などは個人差があるが、それでも4歳から学ぶのはユリアナが歴史上初めてだろう。

「わずか4歳でユリアナは魔力の発現を表した…それほどまでにあ

の子の力は強いんだ。本人がその気になればこの世界を滅ぼす事も容易なくらいにね。：それに私達の一族はこの世界の創造神の唯一の末裔。この血が絶えてしまったら：世界は塵に還ってしまおう。」手にさらに力がこもり爪が肌に食い込む。

ユリアナにはこの事をまだ知らない。歴史の授業で習うだろうが、まだ先の事：知らせる事を、私はあの子や王妃を失う事を怖れている。愛する王妃とユリアナだけが私に残された唯一の家族だから。祖父母や両親、血の繋がる者は王妃以外全てあの日に失ってしまった：私の、私達の大切な大切な愛しい姫。

「：爪が手に食い込んで血が出てしまっています。あの日の事を思い出されたのですか？私にどうか話してくださいませ。」そう言っ
てそっと私の手をハンカチで優しく包みこむ。この人のこういうところが愛しくて堪らない。

「すまない。：お前の言う通りだよ。あの日の事を思い出していたんだ：あの悲劇の日の事を。私は恐ろしいんだ、ユリアナとお前を失う事が：この世界の、そしてこの国の民が苦しむ姿を見ることが。」

「陛下：私を見てくださいます、私の目を。」
そう言って無理に視線をあわす。

「王妃：ユリアナ？」

訝しげに問いかけると、ユリアナは息を深く吸い、話し出す。

「陛下のおっしゃられた通り、私達一族は確かにこの身体に流れる血によって邪な者達に命を狙われてきました：あの悲劇が起きたのもそれが原因。私達は大切な者をたくさん失ってしまいました、生き延びることが出来たのは本当に奇跡でした。」

「その通りだ：。私とお前が生き延び、今が存在しているのだから

ね。」

「はい。そしてユリアナが生まれました。これもまた奇跡だと私は思いますわ。…陛下、確かに私達の娘は予言の印を持ち、強い魔力を宿して生まれました。ユリアナが生まれた時にも言いましたが、ユリアナの人生は苦難の連続でしょう、予言の子ですから。…でも、まだユリアナはたったの4歳の幼子です。せめて今はあの子の幸せだけを願いませんか？予言や先の事はなるべく考えないようにし、過去の事を引きずらず、今だけを。それが今私達があの子にしてやれる事ではありませんか？」

…ユリアアの言う通りだ。

「…そうだね。私は過去を引きずりすぎている。それに今を大切にしなければいけないのに、予言や世界やまだ起きていない事を恐れすぎていたようだ…ありがとう、ユリアア。」

「いいえ、陛下。私も陛下に偉そうに言いましたが、考えていたことがあまりにも同じで自分に対しても戒めとして言いましたから、お互い様です。」

「そうか…。」

「はい。でも、何だか少し吹っ切れた気がします。」

そう言って微かに微笑みを浮かべ、そのまま言葉を続けた。

「それに私は陛下を置いていたりはしません。…愛しています、陛下。」

「ユリアア…。私もだ。私の愛しい王妃、大切な人。」

そう言って抱きしめる。ユリアアの温かさが私を包む。

「…だがこのままではユリアナの魔力はいつか暴走してしまうだろう。」

魔力の暴走は下手をすると大災害に繋がることがある。

「そればかりはユリアナ自信にしか出来ないことです…魔法の授業でコントロールを覚えない限りは。」

「幸い私達の姫はあの年で複数の学問を修めてしまうほどの秀才だ、歴史は最終科目だからまだ先だけだね…ユリアナならやり方さえ覚えればなんとかなるだろうが、心配だよ。」

「ユリアナを信じましょう。これに関しては私達に出来る事はそれくらいしかありません。」

「…そうだね。」

そう言って目を閉じる。浮かぶのは、ユリアナとユーリアの笑顔。私が守ってみせる。

「…陛下、そろそろ御公務に行かないと…あの宰相がまた騒ぎだします。」

感慨に耽っているうちにかなりの時間が経ったらしい。

宰相…アルベルの怒った顔が脳裏に浮かぶようだ。

「また魔法でストレスの発散をされると厄介だからね…そろそろ行くとするか。」

以前にアルベルを怒らせた時は、寝室のベッドの中に巨大なタランチュラが入っていたことがある（しかも虫ではなくモンスターのほう）。蜘蛛嫌いの私には相当なダメージだったな。

ふと苦笑が漏れる。

「?…はい。」

そんな私を訝しげに思ったのか、ユーリアは首を傾つつも微笑み、私達は手を繋いで公務室へ向かった。

―――

しばらくすると公務室と扉の前に着いた。
少し耳を澄ませてみる。

……《陛下と王妃様はまだ来られないのか》！

「…アルベルの声がするね。」

「いつもながら元気いっぱいですね。」

そう話しながら公務室の扉を開く。

アルベルと目が合う。

「…陛下――！！！」

この後はてつきよく二人仲良くアルベルから説教を貰ってしまった。

）両親side終わり）

4歳の私の日々 中 閑話 両親side（後書き）

お気に入り登録ありがとうございました

主人公のネタバレ（ほとんど？）しまくりですね…私も驚いています（苦笑）

主人公の運命が重すぎる…思うがままに書いた結果ですかね？
更新も引き続きがんばっていきますのでよろしくお願いします？

4歳の私の日々 下 朝食後の私の私生活（前書き）

主人公視点に戻ります

4歳の私の日々 下 朝食後の私の私生活

「お、おはようございます、クリス先生。」

扉を開け入室すると、案の定クリス先生が仁王立ちで私の前に立ちはだかった。：これは相当お怒りだな、無表情でさらに迫力が出ている。せっかく美人なのに本当にもったいないとまた思う。

「おはようございます、王女様。ずいぶんと遅うございましたね？」
声にまで怒りが滲み出ている。このままいくとクリス先生は般若になっってしまうだろう。：それだけは避けたい。

「朝からいろいろとあったので遅れてしまいました：申し訳ありません。」

そう言って伏し目がちになるよう努力する。
嘘はついてない：うん。

何か上のほうから鋭い視線を感じるけどきつと気のせいだ、私は知らない：気になんかなってないもんね！

「……………そうですか。分かりました。しかしこれからはきちんと時間通りにいらっしゃってください。」

「はい、先生。気をつけます：二度と遅れたりしません。」

なんとか騙しきれたようだ。

なんだか間があったような気もするけど：まあいいか。

一人で勝手に解決する。

「では、今日はこの世界の公用語であるシヤルについてお教えします。席についてテキストを開いてください。」

「はい。」

私は席についてテキストをめくった。シャルは元の世界でいう英語のようなもので、王族であるからには習得することは必要不可欠だ。死ぬ気で勉強しないと、この世界では生き残れないだろう…多分間違いない。

この任務を遂行するために、私はすべての意識をクリス先生の講義とテキストに注いだ。

…やっとクリス先生の授業が終わった。任務遂行完了、よくやった私。

「今日の授業は終了です。…これは今日の課題ですので、忘れずに明日提出してくださいね。」

そう言ってプリントと問題集の山を私の前に置く。

ドンッ

…この量を一日でやれと!?!?
鬼だ、私の前に鬼がいる。

「この量をですか?…無理です、私にはできません」提出は絶対ですの
で。勉強の進み具合を宰相様にご報告しなければいけませんので頑
張ってください、王女様。…王女様ならきつと出来ますわ、私めが
今日お教えしたシウルをあんなに完璧に理解されたのですから。」
そして微笑むクリスマス先生。笑うと雰囲気さがらりと変わる。いつも
怒らずに笑っていればすぐにでも恋人が出来るだろうと思われる（
クリスマス先生は恋人が出来てもすぐにフラれるらしい…アナベルから
の情報だけどね）…宝の持ち腐れとはこのことじゃあないだろうか。

「でも…、」

「王女様。…出来ますよね?」

先生の微笑みが温かいものから冷たいものに変わる。口調も心なし
怖い。…ブリザードも今なら見える気がする。

「…出来ます。ぜひともやらさせていただきます。生意気言っ
て申し訳ありませんでした。」

負けました。

私は白旗を揚げた。

「では、失礼させていただきます。」
扉を開け退室する先生。

「ありがとうございます。また明日お願いします。」
こう言わないと後が怖いので（礼儀作法には特にうるさい）最後ま
で気を抜かず挨拶する。

「こちらこそ…。課題も忘れずにお願いします。それでは。」

パタン

扉が閉まる音がしたのと同時に椅子になだれこむ。

疲れた…。座りすぎて尻が痛い。しかし、この課題の山をどうやって片付けようか…。だめだ頭が痛くなってきた。今日は徹夜決定だな。私が4歳だという事を皆絶対忘れてるよ。まあ精神年齢が身体の年齢をはるかに上回っちゃってるけどさ。…今までに何回この自問自答（もう心の叫びに近い）したんだろ私、今日だけで軽く5、6回はしてる気がするんだけど。

…あつ、今何時だろ？

あわてて時計を見ると、2時にさしかかるところだった。

「確か今日の残りの授業は…あとは魔法だけか。やった！」

ガッツポーズを決める。確か今日の授業は魔法の実技テストだ。コップをアヒルに変える初歩的な魔法だが、これがまた難しい。元の世界に魔法なんてなかったから余計に。

「そろそろ行かないと間に合わないな。」

ダッシュで窓から外へ向かう（ほら、めんどくさいし）。魔法のテストは屋外でするためだ（師匠いわく、外のほうが気とやらの流れがいいらしい）。

「こんにちは、ユリアナ様。今日もお元気ですな。」
そういつてフォッフフォッフオツと笑う師匠。今日も長いお髭が素敵ですね。

師匠のオリエルはこの世界の五大魔法使いの一人（両親もその一員らしい）で、若いときはドラゴンやエルフなどの異種族と一緒に旅をしていたらしい（どっかのゲームみたいにモンスター倒しに行ったりとか迷宮を探検したりとか）：いいな、私も旅してみたい。
……とにかく師匠はとても人あたりのいいおじいちゃんである。

「師匠の髭も相変わらずご立派ですね。：今日もよろしく願います。」

「では始めましょうかの。今日は実技でしたかな？」
最近物忘れが酷くてのゝと笑いながら言う師匠。まあ100歳なにかとつくに越えてしまってるから仕方がない（師匠はエルフと人間のハーフ）。普通の人間だったら物忘れが酷くなる前にとつくにこの世からお陀仏している年齢だからね。

「はい、コップをアヒルに変えるテストです。」
「そうじゃった。：では、早速やってみてください。もし呪文を詠唱せずに見事成功させる事が出来たら、点数をおまけいたしますぞ。ついでにわしの特製モンブランもお付けいたしましょう。」
それを聞いた私は俄然やる気になる。絶対成功させてやる。
悲しいかな、師匠のモンブランにつられる私：だって師匠の特製モンブラン凄く美味しくて大好きなんだもん（こういうところは4歳らしいと思う）。

机の上にあるコップに意識を集中させアヒルを想像する。もちろん詠唱はしていない。

（アヒルになれアヒルになれアヒルになれモンブラン食べたいんだ

よとつとアヒルになりやがれやクソコップ)

ボン

間拔けな音がしたかと思うと、コップがアヒルに変わっていた。
よし！これでモンブランは私のものだ。顔が自然とにやつく。

「お見事。ではお約束通りのモンブランをどうぞ。」
パチンツと師匠が指を鳴らすと私達のの前に複数のモンブランが現れた。

「幸い紅茶の用意もしてきたので、今日は授業を終わりにしてお茶会といきましょうぞ。」

私に椅子に座るよう促す。

「さすが師匠！太っ腹ですね。」

迷わず椅子に座る。

「まずは紅茶でもどうぞ。砂糖はいれますかな？」

「はい。いただきます。」

そして紅茶を飲む。やはり師匠の紅茶もとても美味しい。…さて、
いよいよモンブランの出番だ。

「師匠、モンブランはまだですか？」

待ちきれずに催促をする。意地汚いとか関係ない…モンブランをいかに早く手に入れるか、私の頭の中は今その事しか存在していない。

「フオッフオッフオッフ。そう焦らんでもモンブランは逃げたりせんよ。ほれ、召し上がれ。」

「いただきます！」

そしてモンブランを頬張る。

「そうがつつくと喉に詰まる「ゲホッ。」：ほれみなされ、言わんこっちゃない。」

案の定どこかのアニメや漫画に出てくるキャラクターのように、モンブランを喉に詰まらせた私に紅茶を差し出す。

「：すいません。あまりにもモンブランが美味すぎてつい。」

「それは作った本人として嬉しいことじゃ。しかし、次はゆっくりお食べなされ：モンブランは逃げたりせんしう。」

「はい。：では改めていただきます。」

食べる事を再開する。

「さて、わしも食べるとするかの。」

そう言いモンブランを食べ始める。

――：――

――：――

「：さて、日も暮れてきたことじゃ。そろそろお開きにするかな。」

「モンブランと紅茶、ごちそうさまでした。」

「フォッフォッフォッ。：そろそろ部屋に戻らねばあの侍女がうる

さいのではないか？」

師匠の懐中時計を見ると、すでに5時を過ぎていた。

「…ヤバイ。」

「早くお戻りなされ。」

「そうします…本当にごちそうさまでした。」

「どういたしました。…魔法は授業以外ではまだ使用なさないように。魔力をまだ制御できないうちにみだりに使用することはとても危険じゃからな！」 「分かっています。…それでは失礼しますっ。」

言うと同時に部屋に向かって走り出す。…こんな時に移動魔法が使えたらどんなに便利だろうか。まだまだ魔力も安定しておらず初歩の魔法を習い始めた私には高尚すぎるのが残念極まりない。

………

………

部屋に戻った後はやはりアナベルに叱られ、夕食にも遅れて散々だった（父様と母様は相変わらぬイチヤつきぶり）。武術の自己練習（今日は師範がおらず、武術の授業がなかったから余計）を終え、最後の難関である課題に取りかかる。

「…終わる気がしない。」

だが、サボればクリス先生のお怒りを買ってしまふ。

頑張れ、頑張るんだ私！お前なら出来る！

次の日、課題はなんとかやり終えたが寝坊をして授業に遅刻し、結局クリスマス先生に叱られてしまった。

いいかげん繰り返すのも疲れてきたがやはり思う。

：私は4歳の幼児なんだけど皆忘れてない？絶対忘れてるよね、本当にさ。

4歳の私の日々 下 朝食後の私の私生活（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。どんどん増えて本人もびっくりしています！

更新しようにもプスランプに陥ったり何通りも話が浮かんではま
いなかなか書き進まず挙げ句には内容が長くなってしまいました。
内容がグダグダしているかも知れませんがよろしくお願いいたします。

改稿しました

7歳の私 上 予言の印（前書き）

一気に3年経ちました

7歳の私 上 予言の印

危機が迫るとき、ゼノフィアの王族より選定者が現れる。

額に唐草の印を持つ者が選定者である証であり、危機を選定（運命を決める）するであろう。つまりはすべてを終わらせる事も与えもする者。

後裔の者達よ、気をつけよ。

我が血筋が途絶える時、世界が終わる。

大層な予言だなあ…、《選定者》とかどっかのゲームみたいだなおい。

…ん？額の唐草模様…私あるじゃないか。
もしかして…

「…つ、つまりこの《選定者》が私だという事ですか？」
あまりの事に声が掠れる。

「そういうことになりますね、王女様。」

私の動揺しきった問いに即答するクリス先生。

今、私は衝撃的な事実を聞かされていた…声が出ないくらいの。

私が7歳になり、学問の授業ほぼすべての科目を修めたので、少し前から最終科目である歴史を習い始めた。歴史が全科目の中でも一番長く勉強するため（テキストも比べられないくらい分厚い）最終科目に指定されていたらしい。だがまさかこんな内容だとはさすがに私は予想していなかった。

一番始めに習った事がこの世界の始まりについてだ。その時点であまりにも元の世界の歴史（惑星の誕生あたりとか）と違い戸惑ってしまった。

（この世界は創造神によって創造された。何もなかった暗闇に、創造神は始めに天と地を分け、その次に海や川、山などを地に置いた。創造神はまた天（宇宙？）には雲や太陽や月や星、地にはすべての生物を創造し、今の世界が誕生した。創造神はそれらのすべてを見守りながら夫と平和に時を過ごしたが、平和はあるとき突然崩された。夫が何者かによって命を奪われてしまったからだ。創造神は嘆き悲しみ、ついには命を絶ってしまう。残された創造神の子らは下界に降り、最初の国を作った。その国が今のゼノフィアであり、王族は創造神の唯一の子孫である）

これを知った時かなりの衝撃を受けたが、今聞いた予言に対してのものに比べたら、たいした事はないと思う、絶対。

この世界に王女として生まれた時から、平凡な人生は送れないだろうと予想はしていた。

まず恋愛結婚は無理だなとか国の跡継ぎにならざる終えないだろうくらいの予想は。…だがこれはあまりにもレベルが違いすぎる。

私には到底無理だ。

危機ってどのような危機なのか？……考えたくもない。

「何かの間違いでは？このような印を持つ方など、たくさんおられるのではないでしょうか？」

そうであってくれ。虚しい希望を抱く。

だが、私の希望はまんまと打ち碎かれる。

「間違いなく王女様の事にございます。王族でその印をお持ちなのは王女様だけですし、大神官様からもしっかりお墨付きをいただいております。」

「私には無理です。そんな大層なこと出来ません。」

「……私に言われましても。私は王女様に残念ながら学問をお教えるだけの身ですので、そういう事にはお答えすることは出来かねます。詳しくは存じ上げませんし：直接陛下方か大神官様かオリエル殿にお聞きするのが一番いいと思いますわ。」

確かにその通りだ。だが、大神官に聞くのはまず地理的に遠すぎるしめんどくさいし私はチキンハートなので却下。師匠は今日はぎっくり腰で授業がないのでこれも却下。残るは父様母様だ。：問いたださないとね。なぜ今までこんな重要な事を教えてくれなかったのか是非とも知りたいしね。

「今日の授業はこれで終了です。では失礼させていただきます：今日は課題はないのですので。」

「！はい、分かりました。ありがとうございました。」

「それでは。」

：珍しいことだ。あのクリス先生が課題を出さないなんて：槍でも

降るのではないだろうか。

：おっと、こんな下らない事を考えて時間を潰している暇はない、父様母様に問いただしにいかないと。

「：移動魔法でも使おう。」

4歳の時とは違い、もう移動魔法は習得しているから数ヶ所を除いてどこへでも行ける。あの頃に比べたら本当に成長したよ私。

場所を父様達の部屋に指定し、呪文は時間がもったいないので詠唱せず使用する。

：問いただした後はついでに師匠の部屋へお見舞いに行こう。バナナとリンゴどっちがいいだろうか。

そんな事を考えながら私は魔法を実行する。

待ってろよ、父様母様（特に父様）。私に黙ってたなんていい度胸だよ本当に：すべて吐かせてやるんだからね！

7歳の私 上 予言の印（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます

主人公がやっと自分の事を知ります（まだすべてではありませんが）
！

次は両親も出てきます

更新が遅れてしまいました…暑さにやられてずっとねてしまっていました？

感想や誤字などの指摘があったら是非教えてください

改稿しました

7歳の私 中 調子に乗り過ぎた私（前書き）

いろいろ脱線してしまいました

7歳の私 中 調子に乗り過ぎた私

「…到着。」

私はあっという間に目的地に到着した。普段はなるべく自分で移動するようにしているの（身体がなまるし肥満防止のため）、今まで実感があまり湧かなかったが、移動魔法は本当に便利だなと改めて感心した。

…いかんいかん、目的を忘れるところだった。
気を引き締め直し、やけに大きい扉の前に立つ。

「ユリアナです。失礼します。」

問いただすべくいざ、我が両親の愛の巣へ突入する。

…だが、扉を開けて即座に私は猛烈に後悔をする事になった。

「陛下、アーンしてください。」

「…………（アーンをして食べている）。こうやって食べると数倍美味しいよ。愛がこもっていてね。」

そこには、いつもの数十倍のイチャつきぶりを発揮している両親がいた。ベッドの上でいつも以上に父様と密着した母様がスプーンでプリンをすくい、それを父様がそのまま食べ、クサイ言葉を父様が吐く。聞かたびに背筋がゾクツとするくらい。もう目と耳を塞いでしまいたい。

さすが父様と母様の本拠地なだけはある、私はかなりの精神的なダメージを負った。もし何も知らない一般人がこれを見てしまったら、きっと悶え死んでしまうだろう。

私の存在に気がつかないのか（もう慣れてきた）、二人の雰囲気はだんだんと甘いものへと変化していく。色で例えたらほのかなピンクから情熱的なピンクへといったところだろうか。

…これ以上はいくら日々繰り返される両親のバカップルぶりにさらされ自然に身に付いた少々の耐性（限界はプリンの時点で突破している）もさすがに崩れ去ってしまう気がするので、私の存在を大いにアピールすることにする。

まずは、アルベルから教わったアレを実行してみよう。効果絶大だとアルベルは力説していたが、本当だろうか…。

『我が召喚に答え、我の前に姿を現し、我が願いを叶えよ…召喚、
〈タランチュラ〉』

唱え、印を組む。気づかれないように魔力と自分の気配も念入りに消す。ちなみに私は相変わらず見ようと思えばすぐに見える場所にいる。

少し経って（わずかの間だが）ベッドの真ん中に魔方陣が出現し、想像した通りのタランチュラ（少し大きめ）が数匹出現する。それらはゆっくりと父様の背中に近いいき、這い上り始める。

さすがに何か違和感を感じたのか、父様が背中の方に首を動かす…と同時に悲鳴をあげた。

…アルベルの言っていたことは事実だったらしい。というか今回の呪文聞きかじったのを試してみたがなかなか上手くいったな。

「陛下、慌てずに落ち着いてください！」

母様がそう言って父様の背中に向かって手をつきだすと同時に、タランチュラだけが綺麗に炎に包まれ跡形もなくなった。

…さすが母様。ヘタレの父様と違い瞬時に魔法でタランチュラを退治した。でも母様の纏う雰囲気なんだか微妙に怖いんだけど…。

「…助かった。」

息をつく父様。少しやり過ぎたな。

「ユリアナの仕業でしょう。…アルベルから聞いたのですか？」
くるりと向きを変え、私を見据える。いつの間にかバレていたらし

い。イチャついていた時は気づかなかつたのに、いざ現実世界に戻ると途端にプロの魔法使いに戻る。：最初から気づいてください。普段イチャコラしている間に何かあったらどうするんだよ。だけどあ優しいの母様が怒る事は本当に珍しい事だ：これはクリスマス先生用のあの必殺技を使わないとやばいかもしれない。

「ごめんなさい母様。やり過ぎました：母様達がいつも以上に気づいてくださらなかったものでつい：本当にごめんなさい。」
シュンとうなだれ、上目遣いをする。少し目を潤ませるのがポイントだ：クリスマス先生には効果絶大だが母様はどうだろうか。

「……反省しているようですからいいでしょう。これからはしてはいけませんよ。」

母様にも効いたらしい。普段の母様の笑みが浮かんでいる。
優しい人ほど怒ると恐いというから気をつけないとな。

そしてあることに気づく。

：そういえば当の被害者の父様の声がしない。

「：母様。父様は？」

「そういえば………陛下。」

いた。父様は余程タランチュラが自分の体を這い上ったショックが大きかったのか、部屋の端の椅子に座って呆然としていた：そんなに蜘蛛嫌いだったんですね。ごめんなさい。

父様が帰ってくるまでは、本来の目的を果たすのは待とう：私が原

因だし。二人同時に聞いたほうが手っ取り早い。

数時間、私と母様は談笑をして過ごし暇を潰すことにした。なかなか母様の話はおもしろく、話題には困る事はなかった。

7歳の私 中 調子に乗り過ぎた私（後書き）

あれ…何でこうなった？

なんかいろいろとすいません

不快に思われたでしょうが見逃してやってください

お気に入り登録本当にありがとうございます

誤字などがありましたらお手数ですがお知らせしていただくと嬉しいです

感想お待ちしております

7歳の私 下 決意と覚悟（前書き）

やっと本題にはいります

7歳の私 下 決意と覚悟

「父様母様。お聞きしたいことがあるのですが。」

父様がやっと呆然とした状態から戻ってきたので、さっそく本題に入る。

「なんだい？言ってみなさい。」

「今日、私は驚愕の事実を知りました。その事についてお聞きしたいのです。実は、ここに來たのもそのためなんです。」

「…驚愕の事実とは？」

そう言って二人とも首を傾げる。

「はい、少なくとも私にとってはですが。…今まで予言の事をどうして話してくれなかったのですか。…もっと早く知りたかったです。直接、父様と母様の口から話すことが出来たはずなのに、なぜですか！」

沸きだしてくる怒りを抑えながら話す。

私はそんなに信用がないのだろうか…そうだったら酷すぎはしないか。

私は信じていたのに。いや、今だって信じている。私を生み出してくれた、愛情を注いで育ててくれている大切な両親だから。

二人は少し悲しげな顔をして私を見る。

「授業で習ったんだね。：知らせたくなかった。もっと早くこの事を話してしまえば、幸せな日々が壊れてしまう気がしたんだ。それに、私達もその事についてはずいぶん悩んだ。そしてユリアナが授業で知るまでまったく話さないでおこうと二人で決めたのだよ。：なぜだか分かるかい、ユリアナ？」

逆に尋ね返してきた。

：そんなの分かるわけじゃないじゃないか。

「分かりません。：いったいなぜ？私には知らせる必要がなかったと言いたいのですか！」

「それは違う：それはね、ユリアナ。私達の一族の歴史が深く関係してくるんだよ。その事については習ったのか？」

「：多少は。血筋がどうかいうやつですよね。」

「そう。それが原因で、私達ゼノフィアの王族はずっと命を狙われてきたんだよ。お前は知らなかったかもしれないけどね。私とユリアナでお前を全力で守ってきた。暗殺や己の欲望を叶えるために誘拐をしようとお前に近づいてきた邪な者達の手からね。」

まったく知らなかった：気づきさえしなかった。
だがなぜ私を？

「：何もユリアナだけじゃない。この私やユーリアも何度も危ない目にあってきた：一番酷かったのは、誘拐されかけて大怪我をして死の淵をさ迷ったことかな。：お前には、ユリアナにはそんなめにはあって欲しくなかったし、お前は小さい頃から同年齢の子供たち

よりもずっとしっかりしていたから、知ってしまったら重圧に押し潰されていただろうからね。」

私は自分を恥じた。父様と母様が、先祖達がそんなめにあってきた事を私は想像をする事さえ出来なかった：予言を知って、自分の事で頭がいっぱいだった。

ちよっと考えていたら分かる事なのにだ。

押し黙った私を、母様が優しく抱き締めてくれた。

この部屋に来る前の私のなんと愚かな事か。

「この際、予言に関わる事を私の話せる範囲ですべてをお前に話そう。覚悟はあるかい、ユリアナ？」

そう言うのとひとと私の瞳を見据える。

「：お話してください、父様。」 覚悟は出来ている。

そう言うのと、父様と母様は話してくれた。

私の魔力の事、予言の事、最後には二人にとっては思い出したくもない思い出であるらしい「あの日」の事を。

「私はまだ10歳にもなっていないただの子供で、ユーリアもそうだった。両親や祖父母、叔父夫婦にいとこのユーリアで私達は仲良く過ごしていたんだ。かけがえのない日々だった。毎日が幸せだったよ。だが：あの日に私達の暮らしていた城が何者かに襲撃にあっ

たんだ。たまたま逃げのびた私とユーリアを除いて、一族全員が目の前で殺されていった…今でも忘れることの出来ない光景だよ。城に仕えていた者達にもかなりの死亡者が出た。その中には、私の親友の一人もいた。とにかく凄惨だった。国主を失い、政において大事な役割を果たしていた筆頭の大臣達をも失ったゼノフィアは今では想像のつかないほど荒れ果てた…まさに生きた地獄ではないかとあの時は思った。」

そう言い、父様は唇を噛みしめた。

「このままではいけないと城の生き残った者達と力を合わせ、出来る限りの魔法や兵力を駆使し早急に国を立て直した。そして私はユーリアと結ばれユーリアナ、お前が生まれたんだよ。お前は予言の印を持ち、重い宿命の下に生を受けたが私達二人の大切な娘である事に変わりはない。だから私達は相談して、お前にはある程度成長するまでは知らせないことにしたんだ。」

「…全然知りませんでした。私は何も知らないのに父様と母様に偉そうな事を。」

「いいのですよユリアナ。知らせなかった私達のせいでもあるのですから。」

「母様…。」

「気にしないでいいんだよ。ユーリアの言う通り、私達も悪かったからね。お互い様だよ。」

「父様…：はい。父様と母様は私の幸せを考えてしてくださいだったのですからね…まだ私に話していない事はまだ時がきていないから…ですか？」

「そうではないよ…。時がくる以前にまだはつきりと分らないんだよ。だから、話そうにも私にもよく分からないから話しようがないんだ。あいにく予知夢はユーリアのほうが私より正確だしね…。分かったら次からはきちんとユリアナにも話すよ…。絶対ですよ!」もちろん! 約束だ。」

「じゃあ指切りげんまんしてくれませんか?」

「いくらでもしてあげるよ…。ところで指切りげんまんとはいったい何なんだい?」

この世界には指切りげんまんがどうやら存在しないらしい。
小さな発見だ。

「お互いの小指と小指を組んで、『指切りげんまん嘘ついたら針千本飲ーます指切った』と言って約束しあう事です。」

「針千本は怖いね。」

そう言って、三人でくすくす笑った。

「「指切りげんまん嘘ついたら針千本飲ーます指切った。」」

「これでいいのかな?」

「はい! 約束ですよ。」

「もちろんだよ。」

こうして私達三人は約束をしあった。

今日私はたくさんのお事実を知ったがなぜか不安な気持ちはない（父様や母様は心配しているだろうが。）

予言が本当なら私はかなりの苦難な人生を送るのだろう…。

もう覚悟は出来た。将来訪れるだろう危機から私は私の大切な人を守る。…守ってみせる。

7歳の私 下 決意と覚悟（後書き）

駄文過ぎてみるのがつらい（笑）

次は閑話で師匠の登場です

7歳の私 下 閑話 見舞い（前書き）

番外編みたいな感じで読んでいただけたらありがたいです

7歳の私 下 閑話 見舞い

夜、私は両親の愛の巢（帰る時にはまた始めのときみたいにイチヤついていた）からいったん自分の部屋に帰った後、師匠の部屋に見舞いをしに訪れた。

バナナにするかリングにするかなかなか決まらなかったので、結局両方を持ってきた。師匠も喜ぶだろう（両方師匠の大好物だから）。

「師匠、腰は大丈夫ですか？」

「おお、見舞いに来てくださったのか。：見ての通り、起き上がるのにも一苦労する始末でう。我ながら情けない事じゃわい。」
「そう言いながら師匠はそのまま腰を押さえた。動く度に激痛がはしめるのか、顔を思いきりしかめている。」

「師匠の大好物のリングとバナナを持ってきました。早く腰を治してくださいな。師匠の授業が今の私の生きる上での楽しみ一つなのですから…これからは別の意味でも大切なものなりますし。」
後半は小さい声で独り言のように呟く。

「どういう事ですか？」

師匠の耳にはバッチリ届いていたらしい。地獄耳ですか師匠。

「今まで、私は魔法をただの便利な道具のようにしか考えていませんでした。めんどくさい時には楽をするために使用し、イタズラや城を抜け出して城下町へ降りるために目眩ましや今考えたらバカのようなイタズラのために魔法を使用し、魔法がなぜあるのかを考えたことさえありませんでした。魔法部隊もあるのにその意味でさえ分かりませんでした。けど、今日たくさんの事を：予言の事や私の一族の事を詳しく知って考えを改めました。魔法は私の大切な者達を守る手段の一つである事はもちろん、ただ習い自分のために使うのではなく皆の、民のために使いたいと：そういう意味です。」

「予言の事をお知りになられたのじゃな、王女様。」

「はい。学問の歴史の授業でクリス先生から。その後は父様と母様の部屋に問いただしに行って詳細を知りました。」

「わしがぎっくり腰で寝込んでいる間にそんな事が：。わしも予言の事をあなたに知っていたいながら話さなかった。いくら陛下のご命令とはいえあなたには知る権利があったのにじゃ。：許していただきたい。」

「許すも何も：私の事を心配しての事でしょう。それにもう気にしてません。腹が立たなかったといえば嘘になりますが、父様と母様からたくさんの事を聞いて、それから自分のことしか考えずに腹を立てていた自分が恥ずかしくてしょうがないのに：。ですから気にしないでください。」

「なぜ自分をお責めになる？王女様はこうやってわしのところに、わざわざ見舞いに来てくださった。わしの好物も一緒に持ってきてくださる思いやりのある優しいお方だと思いますぞ。だから自分

を責めになられるのはおやめなさい。やることはただ一つ。その決意を実行する。今しばらくは、それだけで十分では？」

「…ありがとうございます、師匠。少し迷いが吹っ切れました。」

「それはよかった。…では、失礼してお持ちくださったリンゴでも食べましょうや。」

そう言うと、魔法でリンゴの皮をむいて切る。

「では、いただきますよう。」

「はい。…いただきます。」

その後は私達は他愛のないおしゃべりをして過ごした。

師匠の見舞いに行って本当によかったと思う。

魔法も学問も、他の事も未来に、予言に対応するために、準備しないといけないと改めて思う。
備えるために。

7歳の私 下 閑話 見舞い（後書き）

ありがとうございました

感想、誤字などのご指摘もお待ちしております

運命の始まり 上 悲劇の誕生日（前書き）

ついに物語の本当の始まりです

なんでこうなったのか自分でも分からない？

運命の始まり 上 悲劇の誕生日

ある晴れた日の朝。

気持ちよくて、空気の美味しい清々しいとても気持ちのいい朝。
この日は私の9歳の誕生日だった。前日の日から、皆は私に内緒に
しているみたいだったけど、皆は妙にソワソワして、私の誕生日を
祝う準備をしてくれていた。

ただ、両親と師匠の様子が変だった。
いつもと違って、神妙な顔をして三人で何か話し合っているようだ
った。

いつもの私なら、魔法やら何やらで盗み聞きをしただろうが、その
日は誕生日の前日でどこか気を抜いてしまっていたのだろう…大し
て気にも留めなかった。それを私は後に大変後悔する事になるとは
誰が想像出来ただろうか…残念ながら私は出来なかった。

《———!?!?》

バンッ

《キヤーッ》

何だか外がやけに騒がしい。

朝っぱらから、一体何をしているのだろう。目が覚めてしまった。

「……アナベル、何かあったの？」

「……少し前からこの騒ぎです。外の状態を確認しようと思い、扉や窓を開けようとしたのですが、何かに邪魔され開ける事が出来ずに困っていたんです。王女様を起こそうにもなかなか起きられなかったものですから、途方に暮れていたんです。」
アナベルは魔法を使う事が出来ない。

「ごめんなさい。……ちょっと扉から離れてくれる？調べてみるから。」
「
そう言い、ベッドから起き上がり扉へ向かう。

「……はい。これは魔法でしょうか？」

「そうみたい……。いったん解除しないと外には出られないみたい。
……一体何が起こっているのだろう。」

バチンッ

指を鳴らすと魔法は解除され、扉が開いた。

だが、おかしい。

この魔法は明らかに綻びが多すぎる……まるで、かけている最中に何かに襲われてしまったかのような。

それに、外には誰もいない。

「……アナベル、様子がなんだか変だから、気をつけて外に出ましょ

う。」

「…なぜ護衛がないのでしょうか？」

アナベルの言う通り、いつも扉の前にいる護衛がなぜかない。

「…本当に何かが起こっているみたい。とりあえず父様と母様のところに行きましょう…私にしっかり掴まって。…魔法で行くから。」
普通に外へ出てしまうと何か悪い予感がする。
アナベルの腕をがっちり掴む。「はいっ。」

私は移動魔法を使い、アナベルを連れて父様と母様の部屋へ向かった。

………

………

両親の部屋の辺りに着いた。
周辺は、真っ赤な血で満たされていた。知っている顔がいくつも倒れており、既に息はない。血の池ともいうべき悲惨な光景から、目が離れない…一体、何が起こったのだろうか。

「王女様、あまり見ないほうが。：陛下方の下へ行きましょうよう！」
そんな私を心配してか、アナベルは私の後ろに立つと、私からその悲惨な光景を隠そうとする。

「：父様、母様！」

両親の部屋に飛び込むが、二人はいない。

「アナベル：父様と母様がない！」

「では玉座の間に！：城内におられるとしたら、あそこしかございませんわ。さあ、王女様！」

私の手を掴むと、物凄い勢いで走り出した。魔法を使うよりも走っていたほうが玉座の間には速く着くからだろう。

走っている間に、仲のよかった侍女や侍男、いつも私達親子を守ってくれていた騎手達の遺体があちこちにあるのに気がついてしまう。一体、誰がこんな事をしたのだろうか。目的はなんとなく分かる：だが、この者達は関係ないではないか。

「アナベル：：っ、誰がこんなむごい事をつつ：」
目から涙が溢れそうになる。

「わかりません：今はただ陛下の下へ行く事を考えるのです、王女様！」

アナベルの目からはすでに涙が流れている。
つらいのは、私だけじゃない：アナベルもだ。きっと、友人の遺体

があつたのだろう：私を掴んでいる手が震えている。

もっと気丈に振る舞わないと、私はこの国の、ゼノフィアの王女なのだから。

「うんっ：早く、行こう！」

——父様と母様の下へ。

運命の始まり 上 悲劇の誕生日（後書き）

「あの日」の再来です。

シリアスはやっぱり難しい。

内容がごちゃごちゃしていて読みにくいかもしれませんが、どうか
よろしく願います

運命の始まり 中 絶望、崩壊

バンッ

「陛下、王妃様ご無事ですか！」

アナベルが玉座の間に入ろうとする前に私が駆け込む。
目の前に現れたのは、両親と両親を追い詰めている魔術師のような男が対峙しているさまだった。：男からは何か嫌な気配ががする。

「父様、母様！」

「ククク…愚かな。自ら姿を現すとは。」
そう言い、おかしそうに笑う。

「……アナベル、ユリアナを連れて逃げてください！」
母様は必死に私を逃がそうとする。

「アナベル…ユリアナを連れて逃げるんだ。」

「陛下…王妃様。分かりました。王女様、行きましょう！」
アナベルは私の腕を掴み私を連れだそうとする。

でも、父様と母様を置いてなどいけない。

「そうはさせん。私の目的はその王女…その《選定者》だからな。」
そう言うと、魔術師はアナベルに向かって手をかざす。
アナベルを殺す気満々らしい。…そうはさせるか！

アナベルに防御魔法をかけようと魔法を発動する…が、なぜか魔法が発動しない。
扉が勝手に閉まった。逃げ道を、塞がれた。

「…アナベル、逃げて！」

敵は、この魔術師は魔法大国のこの国の中枢をこんな短時間でここまで崩壊させた…魔法を使えないアナベルなど一瞬で殺してしまうだろう…あの者達のように。

魔法を使えない今の私が出来るのは武術のみ。だが、あいにく武術ではこの男の扱う魔法に対抗しようがない。

私はなんて無力なのだろう…あの時誓ったのに、いざという時になにもする事が出来ない。

「アナベル、速く離れるんだ…ユリアナを連れて逃げてくれ！」

父様と母様も魔力を封じられているらしく、拘束されたまま逃げる事もままならない。

私はアナベルの前に出る。

「目的は私なら、これ以上私の大切な人を傷つけないで。…！」
身体が動かない。動くのは首の上だけだ。

「絶望を見るがいい、《選定者》よ。お前のせいでその侍女は死ぬのだ。」

「…やめてっ、アナベルを傷つけないで。」

そんな私を嘲笑いながら魔術師は手をそのまま振り落とした。

ドストドスト

後ろで何か突き刺さるような音がし、それと同時に断末魔の叫びが聞こえた。

その断末魔の叫びはアナベルから発せられたものだった。

どさり

アナベルの身体が力なく私の斜め後ろに倒れた。

「なんて事を…。」

母様が顔を真っ青にして力なく呟いた。

父様は魔術師を今まで見たことがないくらいの怒りの形相で睨みつけている。

私はただその様子を呆然と見ているしか出来なかった。

私のせいでアナベルが死んでしまった。罪のないたくさんの者達の命も、私のせいで。

「己のせいで大切な者を失った気分はどうだ。」

楽しげに笑いながら私を見る。この男はなにがしたいんだ。

「なぜ…なぜアナベルを殺した！私が目的なら私だけ連れて行けばいいのに、なぜ！」

私が叫ぶと愚か者を見るような目で私を見る。

「私が欲するのはこの世界で一番強い魔力のみ。魔力の根源は魂。

必要なのはお前の魂のみだ…お前の心など必要ない。身体はその辺の奴にくれてやる。願いのためなら私は何でもする…理さえも壊す。

」

「…そこまでして叶えたい願いとは何なの？」

「お前が知る必要はない。ここで私に殺されるも同然の目に遭うのだからな。」「そうはさせない！」…ほう。」

父様と母様が私の前に立つ。無理やり拘束を破ったせいで二人とも傷だらけのボロボロだ。

「父様母様！」

「っ…、私達の娘は殺させない。」

「殺させは…しま…せん！」

話すのさえつらそうだ。

私の身体は相変わらずびくともしない。

「無理やり魔術を破ったか…だが、無駄な事！」

私の頭上に数えきれないくらいの槍や剣が現れる。すべて魔法剣や魔槍だ。

「身体は残してやろうと思ったが…面倒だ。そのまま刺されて一家ともども死ね。」

勢いよく、雨のように私達を目指して降り注ぐ。

「――！！！」

ぎゅっと目を閉じる。

さようなら、父様母様。あの世で会いましょう。

だが、身体に痛みは訪れなかった。

かわりに、身体を勢いよく倒される。

「！？」

咄嗟に目を開けようとしたが、目を塞がれた。身体を起こそうにも、指一本動かない。

剣や槍が身体を貫く音がし、ポタリと何か温かい水滴が私の頬に落ちた。

「……？」

私の目を塞いでいる手が消えたのでそっと、目を開ける。

父様と母様が私を庇って全身を貫かれて血だらけになりながらも私に覆い被さっていた。

「「よかった…無事…で……ゲホッ」」

父様と母様はそう言って笑うと、グラリと力なく倒れた。

「父様母様…なぜ私なんかのためにっ。お願いですから死なないで、私を置いていかないでください！」

二人のもとへ行こうと身体を動かそうとするが動かない。

「動け…動け私の身体！」

ぐっと力を込め、再び起き上がろうとする。

魔術師は私をおかしそうに笑った。

「クク：無駄なあがきをするな。力を封じられ魔法も使えないただの子供のお前などに解けやしない。お前の両親は封じられながらも術を破ったがな。………何！」

私は起き上がった。そのまま二人のもとへ駆け寄る。

「大丈夫ですか：しっかりしてください。私を置いていかないで、一緒にいてください父様、母様！」

「……泣かな：いで、ユリアナ。お前の成長する姿を最後までみてやれない私達をどうか：許してくれ。」

「ごめんなさい：思い宿命を背負わせて：しまつて：ごめんなさい、ユリアナ。」

「さようなら、ゼノフィアを：危機から世界を守つて——………」
愛してる

囁き、そのまま目を閉じる。

顔色も蛾のように白くなり、身体も急速に体温を失って、冷たくなつていく。

父様と母様は死んでしまった。

私を庇つたせいで：私が殺したようなものだ。

二人も魔力を封じられていたのに、私を守るために無理に破り力を封じられたまま私を庇つて死んでしまった。

「—————っ父様、母様あ！」

私はなんて無力なんだろう。

大切な者を守ると誓い、今日まで対策のためにいろいろと習得したつもりだった。

だが、所詮は国から出たことさえないただの愚か者だった。

どこかでまだ予言や現実を軽く見ていた自分がいて、それだけで満足してしまっていた。

「これで邪魔をする者はいない。お前のせいで他の者達は命を落とした。…呪いながら死ね、己の存在を、無力さを、この私をな。」どこからか魔法剣を出す。

…身体が熱い。何かが私の中から沸き上がってくる。…止められない。

「……………く…も。よくも、父様と母様を、皆を!!」

私の身体から途方のない魔力が溢れ出す。…魔力が暴走している。床に、壁に、天井に、すべてに亀裂が生じ、今まで見たこともないほど禍々しい巨大な魔方阵が私を中心に現れる。

「これが世界一の力…素晴らしい!!」
狂ったように笑い出す。

【いけない、魔力を抑えてください!このままでは、大陸が消し飛んでしまいます!!】

私の影から見知らぬ男女が現れた。精霊か何かだろう、纏う気からはかなりの高位だと思われた。

「無理だ…力が止まらない。それにあいつを、今すぐ殺してやりたい!!」

両親の、アナベル達の仇。

【このままではいけない…。紫王、主を頼みます！】

女性のほうが魔術師を魔法で攻撃する。だが、その攻撃はいとも簡単に破られてしまう。

「笑止。この程度の魔法でこの私をどうにかすりつもりだとは…。反吐がでるわ！」

ブンッ

剣を持っていないほうの腕を振り上げ、炎の塊を生む。

炎の塊はいくつも女性に向かう。

【…風籠。】

もう少しで衝突しそうなくらいに塊が女性に近づいてきた時、女性の周りに結界が生じた。それに激突し、幾度となく大爆発を起こす。

その間にも、私の激情に合わせるように魔力の暴走は激しさを増している。

憎い憎い殺してやる

私の心を支配しているのはただそれだけ。

…殺してやる！

【…！！。主上、いけません。お力を、感情をお静めください！】

私の変化に気づいたのか、男性のほうが私を抑えようと術を行使す

るが少し遅かった。私は魔術師に向かって魔力の塊（触れたものは消滅してしまう）を無数に作り出し、己の激情のままにぶつけた。命中し、その場所にあった物は跡形もなく消え去り、床にはクレーターが出来た。

だが、あの男の気配は消えていない。ただ姿だけが見えない。

「どこへ逃げた！…殺してやる、八つ裂きにして皆の無念を晴らす！…だから出てこい！！！」

私は気が狂ったように叫んだ。

「私を恨め憎め……。私の名は黒光。今は退いてやるが私はお前を諦めない。お前の魂を手に入れるまで何度でもお前の大切な者をうばい、壊しお前を絶望の底に突き落としてやろう。願いを叶えるためならば私はどんな事でもする。ククク……。」

「お前の思い通りになどさせない！私はお前の願いを何度でも邪魔し、最後にはお前をあの世界に送ってやる！」

私は叫ぶ。

「では失礼しよう…これは私からのプレゼントだ。」

バチッ

私の背中に鋭い痛みが走った。

焼けるように熱い。

「ぐっ……。」

グラリと視界が揺れ、私は床に膝をついた。

何かが私を蝕んでいる。

【主上！】

【主っ】

二人が私に駆け寄る。

何とか声を出そうとするが、痛みが身体を貫き呻き声しか出ない。

【主に何をしたのですか！】

女性は怒りを露にしながら黒光に問いかける。

「王女…《選定者》に呪いをかけたのだ。ゼノフィアの王族は17になるまでに運命の人とやらに出会い、愛し愛されなければ死ぬよう宿命づけられている。…出会う事を邪魔する事はこの私にも出来ない。だから王女は例えその者と出会い愛そうとしても愛せず、愛する事が出来ても相手から愛されないようにしてやったのだ。こうすれば例え17になるまで生き延びようが最終的には私のものになる…。その呪いは寿命さえも刻々と削ってゆく。せいぜいあがけ、《選定者》よ。」

【何という事を！…【かの者を引き裂け、焰爪】】

矢の形をした焰が現れ、部屋中（といってもほとんど原型を留めていない）を炎の柱で埋めつくした。

ククククク…

不気味な高笑いが部屋中に響くと同時に、女性と男性が壁に叩きつけられた。

【ーっ…ううつ】

ズルズルと音をたてて床に落ちた。

あの男の気配はすでに跡形もなく消えた。

皆を、両親を虐殺し、私に呪いをかけた魔術師、黒光。
私はこの名前を頭に、自分のすべてに刻み込んだ。

【主上……。】

後ろから弱々しい声がした。

突然現れたこの二人は一体何者なのか。なぜ私を主と呼ぶのかを聞かなければいけない。

今までの私は今日死んだ。

私は重い身体を引きずりながら、二人のもとへ向かった。

運命の始まり 中絶、崩壊（後書き）

改稿しました

運命の始まり 下 喪失

二人のそばへ行き、私は二人をただ冷静に観察した。

先程までの激情はなりを潜め、もう今までの私とは大きく変わってしまった。

女性の方は男性と比べると位が低いのか、感じられる魔力が少し弱い。

それに比べて男性の方は、圧倒的に魔力が強かった。魔法を使うところをまだ見たことはないが、かなりの使い手だろうと思われた。

二人の外見はそれは美しかった。清浄な気を纏う、清楚な美人といったところだろうか：このような存在は精霊か、エルフくらいだろう。男性は耳が長く尖っているが、エルフとは考えにくい。そもそもエルフは私の影から出てこない。

この姿は仮の姿、またはもう一つの姿だろうと思われる：発せられる気が、魔力がすべてを物語っている。敵である事はまずないだろう、可能性も極めて低い。

ならば何者なのか。

【ご無事でございますか：主上。】

「――：貴方達は何者？その姿は仮の姿か何かだし、なぜ私を主と呼ぶ？」

私を見た男性は私を心配した。 私には心配される価値などない。
己の心配をすればいいのだ。

「答えて…。なぜ私の影から出てきたの、今になって？」

【主上がお知りになりたいのならば幾らでも答えます…ですが、もう一人のほうに気がつくまでどうかお待ちいただけないでしょうか、逃げはいたしませぬゆえ。】
そう言うと、ちらりと横に倒れている女性の方を見る。

「…分かった。それまでは待つ。だけど後でたっぷりと答えて貰うから。」

【御意。…感謝いたします。】

「……………」

私は彼らから離れ、両親の遺体のそばへ歩いて行った。

……………。

二人の遺体は静かに横たわっていた。そっと近づき、膝をつく。

私を庇って死んでしまった、私が殺してしまった最愛の両親。この世界に転生した「神埼結羽」に「ユリアナ」という名を与えてくれた、父様と母様。

床に横たわっている二人の顔は、とても穏やかだ。

「父様、母様。…ごめんなさい。私はこれからお二人の願い通りには生きられないでしょう…。今日は私の誕生日。そして皆を、父様と母様を失った、今までの私が死んだ日でもある。今日をもって私は「私」を、無駄な感情を捨て去ります。あの男を殺すためになら私は何でもするでしょう…人さえも殺す、復讐の鬼になります。もう大切な者を失いたくないのですよ。」

私は「強く」なる…魔法も、武術もすべてを最上級にまで磨いて最強にならなければいけないんだ。…女らしさも必要ないな。

…親不孝の不甲斐ない娘でごめんなさい。父様母様…いや、父上、母上。」

強くなるのに「女らしい感情」は必要ない。
言葉遣いだってそうだ。

「…なぜだろう、涙が出ない。」

それだけではなかった。

どうやって泣くのか、笑うのか、分からない。顔の筋肉も、死んでしまったかのように動かない。怒り、憎しみにまみれた表情はできるのだ。

「本当に、私は今日たくさんものをなくしてしまったのだな。」
そう言い、自分自身を自嘲する。

心の中も、黒いものでいっぱいだ。「負」の感情しかない。

あの男は何もかも奪っていった。私は誓いを守ること出来ず、たそれをただ見ているしか出来なかった。

———私はなぜこの世界に生を受けてしまったのだろう。私が転

生しなければ、存在さえしなければ、事は起こらなかつただろうに。

…予言の「危機」はきつと、いや確実にあの魔術師が引き起こす。
…己の願いを果たすためだけに、たくさんの災いを引き起こし、罪のない善良な者を殺し、命を奪うだろう。理を侵し、破滅をもたらすかもしれない。

「――私が守る。」

私が殺してしまった両親の最期の願いを叶える。これ以上私のせいで罪のない命が奪われるのは絶対に嫌だ…許さない。

呪いはきつと解けないだろう。こんな私が「運命の人」から愛されるはずがない…愛せるはずなどない。
だが、私の魂はあいつには渡さない。

私は両親の遺体に、殺してしまった者達に再び誓う。

「あいつの…黒光の思い通りにはさせない。」
絶対に。

運命の始まり 下 続 誓約

あれから数分経ち、やっと気絶していた女性の意識が戻った。
起きたばかりではつきりしないのか、どこかボーとしているように見える。

こちらとしては、速く情報を得たいので女性の反応は取りあえず無視し、質問を投げかけた。

「…約束通りに答えて貰おうか。まず、お前達の名は？」

【我の名は紫王と申します。】

【…私は、チーリアです。どうかチィとお呼びくださいませ。】
私は、チーリアの願いに対しては、考えておくと空返事をした。

馴れ馴れしいのはあまり好きじゃないし、まだこの二人が信用出来ないから。今の私には、他人を信じる事はかなり自分でも難しいと思われた。

敵ではないと、頭では分かってはいる…だが、私はもうあの時の私ではない、今は氷のように心は冷たい。

「…種族は何だ？人ではないだろう。」

【我は龍。位は龍王、龍を統べる者です。ドラゴンとは遠い親戚です。】

【私は：創造神様より創られし、数多い神々の中の水の女神セイラと大地の神ガイに仕えし高位精霊の長セイルの間に生まれた神でもあり精霊でもある、ただの中途半端な存在です。位は貴女の守護頭、本性は黒豹です。】
やたら長い自己紹介だ。

「私の守護？…一体いつくらいからしていたんだ？」

【貴女がこの世界にお生まれになられた瞬間からです…貴女は我々にとって、かけがえのない存在。すべての神々と精霊は貴方の僕なのです。】

それを聞き、私は目を見開いた…初耳だ。盛大すぎないか。先祖である創造神の唯一の末裔とはいえ、神様を私ごときが主をやってしまったていいのか…今はともかく、普通の元女子高生だった私に。こんな盛大すぎるオプションはいらないんだが。

「何かの間違いだろう、…辞退す【それは出来かねます。《選定者》の宿命とも思ってください。】……チッ。」

どうやら辞退（という名の逃げ）は出来ないらしい。先祖の創造神も面倒…ゴホン、厄介な事を残してくれたものだ。私は最後の子孫なのに（だからこそなのかもしれないが）。

「では聞くが、なぜ私はその神やら精霊の主なんだ？予言のへ危機…とやらを私が止めるためのおまけか何か？。それに私が誕生した時から守護をしていたのなら、なぜ今さら姿を現した？両親は有数の魔法使いだったし、この国はこの世界筆頭の魔法大国だ。…血

筋の保護のために私に子を生ませたいのか？：なら残念だ、私はあいつから貰った呪いで、恋さえも出来ずに死ぬ運命だからな。」

我ながら見事に皮肉にまみれたセリフを言った。

ただ、怒りを感じたが顔は相変わらず強張ったままだ。
私はこれからずっとこうなのだろう。私の中にあつた白い部分は、黒に染まったのだ。

そんな私を紫王は哀しそうに見た。

【……あの男への憎しみが貴女を変えてしまったようですね。それに、ご自分を責めていらっしゃる。】

【主の言う通り、今さら貴女の前に姿を現したのは、陛下と王妃様の御遺志です。お二人は主がお生まれになった時からすでに、このような事になるのを知っていたのです。：〈私達は死んでしまふけれど、貴女の事をいつでも見守っています。：紫王とチーリアと仲良くしてくださいね。〉とおっしゃられていました。】

「：こうなることを知っていたのか、父上と母上は。：ならば、なぜ未来を変えようとしなかったんだ。」

答えは分かっているが、聞かずにはいられなかった。

紫王とチーリアもそれに気づいたが、あえて気づかないふりをし、質問に答えた。

これ以上主を苦しめたくない。

【お二人は何度も未来を変えようとなさっていました。ですが、形を変え、今日起こってしまったのです。】

【未来を変える事は出来ます：ですが、それは時にはいとも簡単に変化する時があれば、何をしてもしてもなかなか変わらない時もあるので

す。今回は王妃様の視られた未来が形を何度も変えて起こったのです。：悪いのは黒光です、他の誰のせいでもありません。」

この私を慰めているのか。

父上と母上はこの二人を私に託された：信じるべきなのか。決心がつかない。

「：チーリアと紫王とかいったな。お前達はその黒光について何を知っている？」

とりあえず今は敵について知る必要がある。

【詳しくは存じませんが、陛下と王妃様が「あの日」と呼びびになられていた事件の首謀者だったのは確かです。あの時の目的はただの暇潰しだったとあの者は陛下に言っていました。：本当に非道な男です。私の本来の姿の持つ牙で噛み殺してやりたいくらいに。」
チーリアは憎々しげに最後の一言を言った。

【あの者は我らと似た存在である事、闇に身を染め途方もない力を手に行っている事、願いのために理を破している事くらいでしょうか。：。】

「：お前達は「あの日」その場にいたのだな。いつ頃から父上と母上に仕えていた？」

【王族歴代の方々に仕えさせていただいております。：創造神亡き後、創造神の唯一の末裔をお守りするようにとの創造神の御遺言からですから、はるか昔からです。】

そう言い何かを思い出すかのように、目を伏せた。

「嫌になった事はないのか？」

先祖神の遺言に縛られ、自由を奪われたようなものだ。

【いいえ。歴代の方々は皆、我らを友のように扱ってくださいました。かけがえのない方々です。少なくとも我には後悔も何もありません…それに、主上にお会いする事も出来ました。】そう言い添え、裏のない笑顔で私に向かってにこりと笑う。

【それは私も同じです。今こうして主に、貴女に会えた。後悔も何ありません。】

今日初めて会った、チーリアと紫王。一族を、先祖を守ってきた二人。

…この二人を信じてみようか。

「……………分かった。不本意だが、お前達を信じる。父上と母上のご遺志でもあるしな。」

【【よろしくお願いいたします。…貴女を命が果てるまでお守り致します。】】

そう言いうと、二人はスッと床に跪いた。

「…なぜ跪く？」

疑問をそのままぶつける。

【主従誓約を…。我らの言う事をよくお聞ください。…我らが貴女にお仕えする戒めのようなものです。】

「…分かった。」

返事に満足したのか、二人はそのまま誓約をし始める。

【龍王紫王及び女神と大地の精霊長の娘チーリアの名において、創造神が予言せし《選定者》ユリアナ、創造神の末裔ゼノフィア王族の王位継承者へ忠誠を捧げる事を誓約申し上げる。我らが命、主へ捧げる事をここに誓約す。】

…何と返事すればいいのだろうか聞いていないのだが。
私が内心少し困っていると、チーリアが囁くように私に指示をだした。

【…ただ「汝らが誓約、我がもとに了承す」とお答えください。】

「……………汝らが誓約、我がもとに了承す。」

こうして私達は誓約を結んだ。彼らは私に忠誠を誓い、命を捧げると言った。

ならば私も、彼らを守る。

今度こそは守ろう。新しき私の大切な仲間を。
私の命にかえても。

継承 立太子

あれから少し経ち、私達は生存者をただただ探す作業をしていた。

【生存者の居場所を示し、その者を救うのだ。これは、主上のたつての願いである…絶対に救うのだぞ。】

たくさんの精霊を呼び出し、紫王が命じた。

おそらく精霊達は紫王の配下の者なのだろう…紫王が命じた瞬間に城のあちこちへ飛び去っていった。

チーリアはすでに城の奥へ探索に向かっている。

誓約を結んだ後、試しに私が二人に命じた事は「生存者の救命と亡くなってしまった者の埋葬」だ。

二人の身の上は分かったが、実力はまだ分からない。まだ私にとっては会って間もなく、二人の性格が分からない。私がこの世界に生まれた瞬間から私を知っていたらしいが、私はまだ本当に知り合ったばかりで、この二人とはうっすらと感じる事が出来る程度の関係でしかないのだ。

こんな私の配下になってくれた二人は絶対を守るとさっき誓った。だが、私の彼らに対する信頼はまだまだない。軽々と人を信じる事が出来なくなってしまった。そのせいだろうか、ただ彼らを利用して自分の自分が確かにここにいる。

…あさましくなったものだ。

私はきつとこれからもつと醜くなっていくだろう。

黒光を憎み、他を憎む。

本当に醜く、卑しい心根になってしまった。

これを闇に堕ちるとでもいうのだろうか…今の私にはまさにピツタリだと思う。

ギイイイ…

扉を開けて進む度に、犠牲者がどんどん増えていく。

今のところ、生きている者には会っていない。報告もなかった。魔法を使い、探索の速度をあげるが結果は変わらない。

足元は血の海になり、遺体がそこらじゅうに転がっている、まさに地獄絵図のよう。私もかなりの返り血を浴び、服は真っ赤に変化し、まさにホラー映画のような状態だ。この世界にはゴースト（幽霊）もかなり存在するので、あながち冗談では収まらない。自らへの嘲りが私を包む。

——今の私を見たら、皆はきっと悲しむだろう、アナベルが特に。

ふとそう思い、さらに私は嘲りを深くする。

まだこんな事を考えているのか、私は。本当に、甘い：甘すぎる。

結局守れないで置いて、こんな事を考える権利は私にはない。

他を利用し、黒光を憎しみ、仇をうつ事だけのために最強を目指してただ、生きる。

これが私に許された唯一の生き方。呪いを受けた私の、唯一の生き方ではないか。

そんな私には、人を愛することなど、異性を愛することなど、出来ない：許されはしない。

私はいつの間にか黒光だけではなく、何もかもが憎くなっていた。意識はしていないが（無意識）、確かにあの後から、心の奥底に沸々と黒いものが湧き、少しずつ、少しずつ満たしていった。

【主：生存者がいました。】

しばらく黙々と探索を相変わらず続けていたら、チーリアが思念（テレパシー：？）を飛ばして報告をしてきた。

私はすぐにチーリアの思念をたどって移動魔法を発動させた。

――：

「…生存者はどのくらいだ。」

【魔術師オリエルをを筆頭に、今現在は地下に避難しておられます。最初は皆さん混乱し、あちらこちらをさまよっておられたのをオリエル殿と宰相が先導なされました。怪我人が多数おり、宰相が指示を出していますが、追いついていないのが現状です。】

「分かった。よく知らせてくれた…引き続き、紫王達と共に探索と埋葬を頼む。」

【…御意。】

そう言うのと、あっという間に姿を消した。地面に潜ったのかもしれない。

私は急いで地下へ向かった。

地下は薄暗いと思っていたが、秘密の抜け道か何かだったらしく、まるで外…本物の森のようだった。さすが、というべきか。

地下は緑に溢れており、どこからか光が仄かに漏れだしていた…魔法だろう。

開けた草原のような場所に人々は身を寄せあっていた。

必死に逃げて来たのだろう、ほとんどの者は傷を負うまたはボロボロだった。

アルベルと師匠はすぐに見つける事が出来た。

「怪我人に治癒魔法を！」

アルベルは声を張り上げ、指示を出していた。

元の世界に生まれていたら間違はなくアメリカかどこかの大統領になっただろう。アルベルにはそれを感じさせるだけの気迫がある。

師匠は怪我人の治療に精を出していた。

師匠がいなかったら、確実に怪我人の半数以上は命を落としていただろう。

師匠の他には魔術師：魔法を扱える者は数名しか見当たらなかった：亡くなってしまったのだろうか。

―ここにも、私のせいで死んでしまった者達がいる。

私は彼らが送るはずだった人生を奪う原因になってしまった。私は彼らへ償わなければならない。

「―：師匠。」

治療に精神を集中させ、私にはまったく気がつかない。

顔色は疲れが滲み出していた。たくさん、数えきれないくらいの怪我人を治療したのだろう。師匠の他にも治療にあたっている術師や医者達も疲労の色を表していた。

「師匠。」

私はもう一度呼び掛けた。

「――！……王女様。ご無事でしたか。：陛下方は、もしやつ。」

私にやっと気づいた師匠は、声を詰まらせた。

気づいていたのだろう：両親の気配が途絶えてしまっていた事に。

「―――父上と母上は…」

「……………王女様!!」

私が答えようと口を開きかけると、私がここにいる事に気づいたらしいアルベルが私のところへ人を掻き分けながら近づいて来る。

「アルベル。」

「ご無事だとあの精霊殿から伺っていましたが、本当に良かった。」

「…私にはそうとも言い難い。私を庇って父上と母上は死んでしまった。」

師匠はあまり驚かなかったが、やはり、と小さく呟いた。アルベルはただ目を伏せた。

「…そうですか。陛下方は、貴女を守って亡くなられたのですか。そう言いい、ずっと視線を私に向ける。」

「何やらお変わりになられてしまったようですね…ご自分を責めておられるのか？」

「―――別に。アルベルには関係のない事だ。」

私が否定すると、アルベルは師匠と顔を見合せ、複雑そうにした。

今の私の心情を素直に言ってしまったら、きっと二人は心配するに決まっている。

そして、私はもう二人の知っている「ユリアナ」ではないのだ。言

う必要はない。

「…そういう事にしておきましょう。王女様、怪我人の手当てはもちろんです、今は大変混乱した状態です。……どうかご指示を。」
「そう言い、唐突に平伏する師匠とアルベル。

それに合わせて次々と皆が平伏していく。

まるでドミノ倒しのよう。

「…なぜ平伏する？今まではしたとしても跪礼だけだっただろう。」
私は少し困惑しながら問うた。

「今日限りで貴女はもう「王女殿下」ではないからでございます。

……陛下方亡き今、貴女は我らが国ゼノフィアの「皇太子」であり、唯一の王族となられた。どうか我らにご指示を。」

「…皇太子。この私がか？」

頭がまたフリーズしかけている。今日は何もかもが唐突すぎはしないか。

「はい。…怪我人が多数おり、建物にも大きな被害が。出来る限りの事は致しておりますが、やはり我々には限界があります…どうかご指示を、皇太子殿下。」

大臣のうちの一人、狼の獣人である国の財政を司る財政大臣のガサルが言った。

狼ゆえか、外見も迫力があるが、その中身にも他人を威圧させる何かを持っている…昔はそれは恐ろしくて仕方がなかったが、今はむしろ心地よく感じた。また、外見に似合わないがとても人望厚い人物（獣人）でもある。

「……皇太子として命ずる。魔法を行使する者は速やかに搜索を開始せよ。治癒魔法を使える者は怪我人の治療を続行し、大臣や官吏は現状を把握せよ。父上と母上のご遺体もどうか……どうか頼む。」

「『……ご指示のままに。』」

一斉に返事をする、各々が自分のすべき事を成すためにさっと散っていた。

「皇太子殿下。」

師匠が私を呼んだ。

「師匠にはどうか前のように呼んでいただきたいのですが。」

「……王女様はもうご両親の事を様づけではお呼びにならないのですな。あと、敬語はお辞めください。皇太子に敬語で話されるような身の上ではないのでな。」

師匠は私の変化を敏感に感じていたらしい。

「分かった……師匠、今までの私は今日死んだ。……師匠は、父上と母上は今日起こる事を知っておられた？だから先日から何かといえ相談のような事をしていたのか？」
前から気になっていた事を聞いた。

「……何かがあるのは分かっておりました。だが、まさか今日このような事が起こると思ってもみなかった事じゃった。言い訳にしか聞こえない事は重々承知。じゃが、我々には、陛下方でさえはつき

りと分からなかった。…ただでさえお二人はかなりの負担がかかっており弱られておられた。今回襲撃した者はそれを狙って来たのでしょうか。…呪いをかけられたようじゃがどのような呪いを受けられたのですか？」

これで謎が一つ解けた。

だからあんなにこそそととしていたのだな。

私はひっそりと納得した。

「―死の呪いだ。ゼノフィアの一族の宿命をうまく利用した…運命の、己の愛する人から決して愛される事のない、私自身が愛す事の出来ぬ呪い。…よく考えついたものだ。」

「そのような呪いを貴女にかける事の出来るほどの使い手だったのですか…じゃが、なぜ貴女の命をそこまでして欲するのじやろうか。目的を達するまでにかなりの時間がかかる。」

「願いを叶えるためなら何でもすると言っていた―理さえも壊すと…本当に愚か者だと思った。」

人は時には何よりも愚かに、卑しくなる生き物だ。裏切り、己の利益のためならば何でもする。…あの男も多分そうなのだろう。

本当に愚かだ。

そして私は卑しくあさましい。

「貴女はこれからどうなさる？」師匠は髭をしごきながら尋ねた。

「…国がある程度落ち着いたら、国外へ行ってみようかと。今のままでは何も出来ない。」

私は深窓の姫君ではない。

国から出てほぼすべての事を身につける。これが私のすべき事、しなければならぬ事なのだ。 仇をうつために。…終わらせるために。

「…時々は国にも帰ってくだらないと困りまするぞ。貴女は大切な方なのじゃから。」

私はただの愚者でしかない。
今こうして生きている事さえ罪なのだ。

「……………分かっている。師匠、私がない間、国をアルベル達と共に守りくださいますか。」
姿勢を正し、軽く頭を下げる。

「……………もちろんですとも。命に変えても守りまする。」
だから頭を上げて欲しい、と言いつつも慌てていた。

師匠達が生きていて本当に良かった。

「…黙祷を。」

犠牲者が埋葬されている場所には生存者で溢れていた。

私は壇上から全体を見渡しても半数以上が犠牲になってしまった事が容易に分かった。

友を失い、同僚を失った。

各々の顔に深い悲しみが刻まれ、涙を流す者が大半だった。

だが私は一滴も涙が出なかった。心が、私自身が泣く事を忘れてしまった――。

犠牲者の埋葬後、父上と母上の遺体は王族の墳墓におさめられた。最後に見た時は、二人の顔にはなぜか仄かな笑みが浮かんでいた。私達の――ゼノフィアの王族の身体は死後も朽ちる事はない。

火事でもない限り、永久に生前の姿をこの世界に留められる。きっと、創造神の血筋のせいだろう、と師匠は言っていたが、私もそうだろうと思う。

せめて先祖達と一緒に安らかな眠りについて欲しいと思わずにはいられない。

この思いに気づいた時にはまだ私にこんな感情が存在していたのかと苦い思いを浮かべてしまった。

――どうか、安らかに。

アウル新暦1000年

魔法大国ゼノフィアに襲撃あり。

多数の犠牲者が出るも城、持ちこたえ唯一人の王族となりし王女ユリアナ・クイル・ゼノフィア（後は略）、皇太子とならん。

） 『ゼノフィア歴史書』 （

継承 立太子（後書き）

改稿しました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4722v/>

転生王女～異端の王女

2011年9月3日06時32分発行